

修正版主張性の4要件尺度の改編

清水美奈¹ 石津憲一郎²

Developing the Revised Four Dimensions of Assertiveness Scale

Mina SHIMIZU, Kenichiro ISHIZU

概要

本研究は、主張性を4要件（素直な表現、情動制御、他者配慮、主体性）から捉え、その4軸から主張性を測定する修正版尺度の改訂を試みるものである。本研究では、正版主張性の4要件尺度における「他者配慮」項目を改編することで、より理論的概念と一致した主張性尺度を作成し、信頼性、妥当性の検討を行う。大学生452名（男性243名、女性204名）から、改編した尺度と青年用アサーション尺度、日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（BAQ）の回答を得た。その結果、改編した尺度からも先行研究と同様の4因子が抽出された。改編した「他者配慮」項目は、青年用アサーション尺度とは正の相関が示され、BAQとは言語的攻撃以外すべての下位項目との相関が弱まった。以上から、改編によって主張性の概念により合致した尺度が作成されたと考えられる。

キーワード：主張性、攻撃性、他者配慮

Keywords：Assertion, Aggression, Consideration

I. 問題と目的

アサーション（主張性）とは、自分も相手も大切にしながら、意見や考え、気持ちを率直に、正直に、その場にふさわしく表現することである（平木, 2009）。また、無藤（2002）によるとアサーションでは“とにかく自己主張をすること”を普遍的理想であるかのように奨励するわけではなく、自分のあり方の選択肢を増やすことが重要である。広がった選択肢のうちから、自分の気持ちや状況、諸条件を考慮しながら自己選択をする基盤には、自分がどのように感じ、自分自身がどのようになりたかということに気づく過程があると述べている。アサーションは捉えにくい概念である（用松・坂中, 2004）ため、何をもってアサーションとするかには様々な考え方があり、研究によって異なる捉え方がなされていた。しかし、渡部（2006）はそれぞれの研究者が提示している主張性概念の中からいくつかの共通する理論的要件を見出し、主張性に関する諸定義から共通して導出される理論的要件を確認している。その結果、主張性は「考えや感情の素直な表現（素直な表現）」「感情に流されない主張（情動制御）」「他者や状況への配慮に基づいた柔軟な対応（他者配慮）」「行動に対する主体的な判断（主体性）」の4つの理論的要件を含む概念であるとした。そして、「素直な表現」は主張性の行動的側面に、「情動制御」は主張性の情動的側面に、「他者配慮」と「主体性」は主張性の認知的側面に、それぞれ該当すると述べてい

る。

それを踏まえ、安藤（2014）は、アサーションは状況による強い影響を受けつつも、個人差の影響を受けて異なる傾向を示すと述べている。アサーションは個人要因としての自尊感情（山根・深見・石野, 2016）や、友人関係満足感（坂田・松田, 2016）の高さとの間に正の関連が示されている。そして環境要因としては、相手との親密度や主張の必要性によって自己表現スタイルの出現頻度が異なる（安藤, 2009）ことや、ソーシャルサポートとアサーションに有意な正の相関がある（Hersen, Kabacoff, Van Hasselt, Null, Ryan, Melton & Segal, 1995）ことが示されている。このように、これまで様々なアサーションの関連要因の研究が行われてきた。このような研究が進展することで、アサーション自体の意義を再問してゆくことができる（用松・坂中, 2004）とともに、アサーションの促進へ向けた環境づくりやアサーション・トレーニング等による支援方法の進展につながると考えられる（高橋, 2006）。これらを実践するためには、実践効果の程度を測定する尺度の標準化が必要とされている（金子・中田, 2003）。

上述のように、これまで主張性に関する様々な尺度が国内外で作成されてきた。しかし、従来の主張性尺度では渡部（2006）の言う主張性の4つの理論的要件すべてを測定することはできない（渡部, 2006）。そこで、渡部（2013）は渡部（2006）の主張性の4要件に基づいて、課題のあった渡部・松井（2006）の主張性の4要件尺度

¹鳥取大学大学院医学系研究科 ²富山大学大学院教職実践開発研究科

を改編し、修正版主張性の4要件尺度を完成させた。よってこの尺度は、アサーションの理論的な4要件を網羅した、既存の尺度の中ではもっとも理論的概念と一致した尺度となっていると考えられる。しかし、まだ不十分な点が見られる。それは、この尺度で測定する「他者配慮」が主張性の概念通りの「他者配慮」を測定できていないと考えられることである。そう考えられる根拠は、「他者配慮」と他の主張性の因子間にはいずれも有意な負の相関（「他者配慮」が「率直な表現」と $r=-.19$ 、「情動制御」と $r=-.59$ 、「主体性」と $r=-.38$ ）が見られること。また、「他者配慮」と攻撃性の認知的側面である「敵意」（例えば「友人の中には、私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない」）との間に $r=.33$ の有意な正の相関が見られることである。

そもそも主張性と攻撃性は、自己の意思や感情を表出するという点で類似している（渡部, 2013）。しかし、主張的な行動では攻撃性と同じように、自分の気持ち、考え、信念などを伝えるものの、相手の人権と自由を尊重しようとする点で、攻撃的な行動と概念上区別される必要がある（平木, 2009; Allen & Anderson, 2015）。しかし、玉瀬・越智・才能・石川（2001）がアサーションの行動面を測定するため作成した青年用アサーション尺度とY-G性格検査の「攻撃性」との間には $r=.51$ の（玉瀬ら, 2001）、日本版Buss-Perry攻撃性質問紙の言語的な攻撃反応を測定しようとする下位尺度で、自己主張、議論好きなどを測定しようとするものである「言語的攻撃性」との間には $r=.70$ の（沢崎, 2006）相関を示すことが報告されている。また、安藤（2014）が行った、5つの行動形態（アサーティブ、攻撃的、非主張的、間接的、短絡的）に相当する具体的な発言内容を文章で提示し、その使用頻度を尋ねた研究からは、アサーティブと共感性との間には関係は認められなかった。このことから、発言の使用頻度から見たアサーティブは、友好的な感情や愛情、互いの人権尊重の気持ちに伴わない技術先行型の自己表現であり、従来の自尊心に基づく適切な自己表現とは異なるものであったと考えられる（安藤, 2014）。またMcCartan & Hargie（2004）も、アサーションと思いやりスキルには関連がないことを示している。このように、アサーションと攻撃性の分離が主張性尺度の一つの課題である。アサーションと攻撃性の分離を困難にしている一因は、性格特性としての攻撃性の活動性・積極性といった側面がアサーティブ行動、アグレッシブ行動の双方と関係があることであると考えられる（用松・坂中, 2004）。よって、攻撃性と高い相関を示す、行動面だけを測定する尺度ではアサーションを正確には捉えられていない可能性がある。行動的側面だけでなく、情動的側面や認知的側面からみる視点が主張性には必要である。

以上から、「他者配慮」が主張性の概念の行動的側面や情動的側面と対立し合い、攻撃性の下位因子である「敵

意」と強い正の相関が見られることは主張性の概念と一致せず、この尺度の「他者配慮」はアサーションを阻害することが分かっている他律的な行動傾向（三田村・横田, 2006）に近い側面を測る項目となっている可能性が考えられる。また、渡部（2013）も「他者配慮」は本来他者の意見や感情を尊重するために行われるものであるはずが、他者や周囲に関心を向ける程度を測定する内容となっていることを課題として挙げている。

このような点から、主張性の理論的要件の一つである「他者や状況への配慮に基づいた柔軟な対応」は、自立的に、他者の率直な表現や他者の主体性を受け入れる姿勢をもち、行動できているかを測定する項目、つまり、修正版主張性の4要件尺度の行動的側面や情動的側面を測定する因子や、日本版Buss-Perry攻撃性質問紙の「敵意」と独立した因子に改編する必要があると考える。よって本研究では、修正版主張性の4要件尺度を基に主張性における「他者配慮」の項目を改編することで、より理論的概念と一致した主張性尺度を作成することとする。さらに、その尺度の信頼性、妥当性を検討するため、日本版Buss-Perry攻撃性質問紙と青年用アサーション尺度との関連を検討する。

II. 方法

1. 調査協力者と手続き

富山県内の大学に在籍する大学生および大学院生にアンケートへの協力を依頼した。質問紙調査は2017年10月から11月に行われ、調査参加者は男性243名、女性204名、不明5名の合計452名であり、平均年齢は19.10歳（ $SD=1.20$ ）であった。

アンケートは、大学の講義や多くの学生が利用する学内の施設において質問紙を配付し、調査対象者に回答を依頼した。回答の際には、調査は匿名で行われ個人が特定されることはないこと、回答するか否かは本人の自由であり回答を辞退しても不利益を被ることはないこと等を調査用紙に明記し、合意を得た上で回答してもらった。

2. 調査内容

1) 改訂された修正版主張性の4要件尺度 「他者配慮」の項目すべて（項目番号2, 5, 6, 7, 10, 17, 22, 28, 31, 37と結果の1）に示した削除された「他者配慮」項目と、一部言葉を分かりやすく（“無理な頼まれごと” → “どうしても嫌な頼まれごと”）改編した修正版主張性の4要件尺度を用いた（Table 1）。「他者配慮」の項目は、前半の状況を説明する部分は先行研究と変えず、先行研究では“相手との関係がどうなるかを考える”や“相手の今の機嫌を推測する”などとなっていた後半部分を、自己表現を行う際の相手の感情や相手との関係性、周囲の状況の考慮を表し、かつ他律的な行動傾向を測らない項目となるよう、“相手の気持ちも考えた伝え方をする”や“相手も自分も納得のいく方法を考える”などに改編

Table 1 改定された修正版主張性尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	M	SD	共通性
素直な表現 ($\alpha = .82$)							
24	.78	-.12	.17	.11	3.90	0.89	.52
25	.64	.12	-.04	-.09	3.84	1.00	.47
32	.62	-.10	-.21	.05	3.69	1.02	.52
35	.61	.02	-.01	-.13	3.92	0.98	.34
14	.61	-.14	.12	.24	3.87	0.96	.39
23	.60	.17	.08	-.16	3.93	1.04	.42
34	.53	.18	-.05	-.08	3.96	0.99	.38
19	.48	.10	-.08	-.10	3.57	1.10	.29
36	.42	-.01	-.34	.19	3.41	1.07	.55
16	.37	-.09	.33	-.30	3.88	1.12	.22
9	.32	.06	-.23	.22	3.54	1.11	.39
他者配慮 ($\alpha = .88$)							
22	-.02	.81	-.09	-.07	3.79	0.91	.61
37	.03	.75	-.06	.02	3.71	0.96	.58
17	-.09	.73	.01	.05	3.74	0.94	.49
31	.05	.67	.12	.11	3.71	0.96	.53
5	-.01	.66	.05	.02	3.87	1.00	.45
10	.00	.61	-.01	.19	3.93	0.92	.45
7	.02	.53	.12	.12	3.55	1.10	.34
6	.17	.48	-.05	.03	3.94	0.92	.35
28	.24	.44	.09	.08	3.56	0.95	.38
2	-.06	.43	.09	.17	3.73	1.10	.20
主体性 ($\alpha = .87$)							
26	-.11	.10	-.96	.17	2.97	1.19	.72
27	.00	.02	-.88	.15	3.08	1.10	.68
38	.05	-.09	-.69	.08	2.92	1.15	.47
15	.11	-.18	-.54	.03	3.22	1.25	.41
21	-.10	-.17	-.52	.29	3.56	1.23	.50
20	-.12	-.03	-.48	.33	3.27	1.20	.43
4	-.17	-.13	.47	.06	3.76	1.16	.30
33	-.01	-.18	-.45	.26	3.36	1.27	.41
18	-.27	-.12	.41	.15	3.49	1.06	.49
情動制御 ($\alpha = .69$)							
29	.11	.14	.01	.62	3.27	1.05	.50
30	.10	.09	-.14	.55	3.41	1.07	.49
1	-.16	.28	.01	.52	3.65	1.19	.30
因子寄与		6.24	5.63	5.44	3.78		
因子間相関		F1	F2	F3	F4		
	F1	1.00	.49	-.40	.40		
	F2		1.00	.13	.13		
	F3			1.00	-.47		
	F4				1.00		

注) * 逆転項目

したものを用いた。改訂された修正版主張性の4要件尺度は、「率直な表現」「情動制御」「他者配慮」「主体性」の4つの下位尺度からなると想定される、38項目によって構成される。質問指示は、以下の文は、今のあなたにどのくらい当てはまりますか？「1:あてはまらない」～「5:あてはまる」の中からそうだと思うものに1つ、○をつけて下さい、とした。ここでは、原版である修正版主張性の4要件尺度にならない“あてはまる”“ややあてはまる”“どちらともいえない”“あまりあてはまらない”“あてはまらない”の5件法で回答を求めた。

2) 青年用アサーション尺度 玉瀬・越智・才能・石川(2001)によって作成された尺度である。「関係形成因子」と「説得交渉因子」の2つの下位尺度からなる16項目によって構成されている。ここでは、先行研究に倣い“必ずそうする”から“まったくそうしない”までの5件法で回答を求めた。

3) 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) 安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井(1999)によって作成された尺度である。「短気」「敵意」「身体的攻撃」「言語的攻撃」の4つの下位尺度からなる24項目によって構成されている。ここでは、先行研究に倣い“非常によくあてはまる”から“まったくあてはまらない”の5件法で回答を求めた。

Ⅲ. 結果

1. 尺度の因子構造と信頼性

改訂された修正版主張性の4要件尺度の因子構造を検討するため、①改訂された修正版主張性の4要件尺度において、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。また、その構成概念妥当性を検討するために用いた②日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙、③青年用アサーション尺度においても因子分析を行った。

1) 改訂された修正版主張性の4要件尺度

最尤法による因子分析を行った。固有値の減衰が9.00, 5.90, 2.11, 1.55, 1.27, 1.14…であることと主張性の構成概念から、先行研究同様に、4因子解を求めることが妥当であると判断した。そこで、4因子解を想定し最尤法、プロマックス回転による因子分析を行ったところ、いくつかの項目が削除された。まず、先行研究では「主体性」の項目である“貸した物を返してもらえないとき、相手に対してどう対応したらよいか、自分で判断する”、“素直な表現”の項目である“貸した物を返してもらえないときは、「返して欲しい」と素直に言う”、“情動制御”の項目である“どうしてもいやな頼まれごとをされると、不安な気持ちになる”、さらに今回修正した「他者配慮」の項目である“相手と自分の意見が違ふとき、自分の意見を言う時は相手の意見もきこうとする”は、天井効果の傾向が見られたため除外された。また、「他者配慮」の項目である“どうしても嫌な頼まれごとをされたとき、

相手の話は積極的にきく”は重複負荷の傾向が見られたため除外された。以上5項目を除き、再度因子分析を行ったところ、4因子による回転前の累積寄与率は50.80%であった (Table 1)。また、CFIは.88, RMSEAは.06となった。第1因子は“相手と自分の意見が違ふときは、自分の意見を素直に言う”や“相手と自分の意見が違ふときは、そのような意見を持った理由を説明する”といった項目から構成されており、先行研究と同様に「素直な表現」と命名した。第2因子は“相手と異なる意見を言うとき、相手の気持ちも考えた伝え方をする”や“貸していたもの「返してほしい」と言うとき、相手の状況も考える”といった項目から構成されており、先行研究と同様に「他者配慮」と命名した。第3因子は“どうしても嫌なことを頼まれたときでも、相手や周囲の人に合わせて行動してしまう (反転項目)”や“どうしても嫌な頼まれごとをされたら、「できない」と素直に言う”といった項目から構成されており、先行研究と同様に「主体性」と命名した。第4因子は“どうしても嫌な頼まれごとをされたときでも、いつもどおりに落ち着いて対処できる”や“相手と自分の意見が異なっても、いつも通りに平静でいられる”といった項目から構成されており、先行研究と同様に「情動制御」と命名した。クロンバックの α 係数を各因子で算出したところ、第1因子から第4因子まで順に.82, .88, .87, .69となった。

2) 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙

日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙の各質問において、因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行ったところ、安藤ら (1999) と同様、4因子が抽出された。因子負荷量の小さい1項目を削除し、再度因子分析を行い、因子解釈可能性を考慮して、4因子解を採用した (Table 2)。

第1因子は、「敵意 ($\alpha = .77$)」、第2因子は、「短気 ($\alpha = .80$)」、第3因子は、「身体的攻撃 ($\alpha = .78$)」、第4因子は、「言語的攻撃 ($\alpha = .69$)」とそれぞれ命名した。因子間相関は、-.03 (「短気」「言語的攻撃」間) から .54 (「敵意」「短気」及び「敵意」「身体的攻撃」間) であった。

3) 青年用アサーション尺度

青年用アサーション尺度の各質問において、主成分分析を行った。因子負荷量の小さい2項目を削除し再度因子分析を行ったところすべての項目が第一主成分に寄与していた。因子は $\alpha = .78$ であった (Table 3)。先行研究では2因子が抽出されることが多い (玉瀬ら, 2001; 渡部, 2013; 伊庭・幸田, 2014 など) が、2因子を想定して因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行ったところ α 係数が.75, .52と、特に第2因子の値が十分ではなかったため、本研究では1因子解を採用した。

2. 妥当性の検討

改訂された修正版主張性の4要件尺度の妥当性を検討するため、改訂された修正版主張性の4要件尺度の下位尺度と日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙、青年用アサーション尺度の下位尺度との相関係数を算出した

Table 2 日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	M	SD	共通性
短気 ($\alpha = .77$)							
6 かつとなることを抑えることが難しいときがある	.81	-.05	-.11	.04	2.79	1.16	.54
8 ばかにされると、すぐ頭に血がのぼる	.76	-.01	.02	-.09	2.59	1.12	.59
13 たいした理由もなくかつとなることがある	.62	.00	.09	-.17	2.53	1.21	.47
11 いらいらしていると、すぐ顔に出る	.61	.01	-.20	.17	3.35	1.09	.31
4 ちょっとした言い合いでも、声が大きくなる	.45	.06	-.12	.29	2.87	1.12	.26
24 かつとなって、物を壊したくなることもある	.36	.07	.28	-.05	2.62	1.33	.36
敵意 ($\alpha = .80$)							
15 私を嫌っている人は結構いると思う	-.05	.84	.02	-.03	3.28	1.03	.68
23 友人の中には、私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない	.04	.66	-.04	.06	3.20	1.11	.45
7 陰で人から笑われているように思うことがある	.18	.60	-.10	-.15	3.35	1.19	.50
10 私を苦しめようと思っている人はいない*	.08	-.56	-.06	.01	3.06	1.12	.29
16 人とよく意見が対立する	.01	.54	.06	.32	2.67	.94	.42
18 人からばかにされたり、意地悪されたと感じたことはほとんどない*	.07	-.49	.00	.03	2.56	1.10	.21
20 嫌いな人に出会うことが多い	.21	.37	.07	-.03	2.62	1.10	.30
身体的攻撃 ($\alpha = .78$)							
19 権利を守るためには暴力もやむを得ないと思う	-.18	.04	.71	-.01	2.47	1.19	.41
17 人をなぐりたいという気持ちになることがある	.20	.09	.59	-.06	2.23	1.21	.58
14 挑発されたら、相手をなぐりたくなるかもしれない	.33	-.03	.58	-.05	2.40	1.28	.62
21 なぐられたら、なぐり返すと思う	.03	-.04	.58	.23	2.72	1.34	.44
2 どんな場合でも、暴力に正当な理由があるとは思えない*	.26	-.10	-.57	.05	3.48	1.17	.25
5 相手が先に手を出したとしても、やりかえさない*	-.11	.19	-.45	-.13	2.95	1.13	.25
言語的攻撃 ($\alpha = .70$)							
9 友人の意見に賛成できないときには、はっきり言う	-.06	.04	.08	.69	3.19	1.01	.50
22 自分の権利は遠慮しないで主張する	-.07	-.07	.19	.59	3.16	1.07	.41
3 誰かに不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきり言う	.09	-.15	-.08	.56	3.14	1.04	.34
1 意見が対立したときは、議論しないと気がすまない	.11	.13	-.07	.56	2.99	1.14	.34
因子寄与							
	4.20	3.82	3.56	1.93			
因子間相関							
	F1	F2	F3	F4			
F1	1.00	.54	.54	.03			
F2		1.00	.38	-.03			
F3			1.00	.17			
F4				1.00			

注) * 逆転項目

Table 3 青年用アサーション尺度の因子分析結果

	F1	M	SD	共通性	
アサーション ($\alpha = .78$)					
12 少人数の話し合いの場で進んで意見を述べる	.64	3.03	1.09	.41	
15 自分に分からないことがあれば、説明を求める	.61	3.72	0.92	.37	
13 好意を持った相手には自分から話し掛ける	.61	3.09	1.15	.37	
11 大事な話の途中で口をはさまれたら話が終わるまで待ってくれるように言う	.55	2.72	1.10	.31	
9 凶々しく不正な人がいたら、その人に注意する	.55	2.64	1.00	.31	
14 他人から誤解されたら、誤解が解けるように話をする	.54	3.65	0.99	.29	
5 友達に頼み事をしたい時には素直に言う	.53	3.94	0.91	.28	
7 好きな人には率直に愛情や好意を示す	.50	3.37	1.18	.25	
10 友達のいいところを見つけたら率直に誉める	.50	3.78	0.91	.25	
1 買った商品に欠陥があったら交換してもらおう	.47	3.35	1.02	.22	
2 親に反対されそうなことでも必要なら親に言う	.44	3.75	1.04	.20	
6 友達の都合を一方的に押しつけられた時は断る	.44	3.42	0.95	.19	
3 勉強している時に隣で騒いでいる人がいても何も言わない*	-.37	3.49	1.04	.14	
8 先生から腹の立つようなことを言われても黙っている*	-.37	3.46	1.12	.14	
因子寄与					
	3.72				

注) * 逆転項目

Table 4 3つの尺度の因子別得点の相関係数

	改訂された修正版主張性の4要件尺度				青年用アサーション尺度	日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙			
	素直な表現	他者配慮	主体性	情動制御		短気	敵意	身体的攻撃	言語的攻撃
素直な表現	1.00								
他者配慮	.51 **	1.00							
主体性	.32 **	-.10 *	1.00						
情動制御	.43 **	.38 **	.32 **	1.00					
アサーション	.26 **	.18 **	.11 *	.14 **	1.00				
短気	-.05	-.08 +	-.10 *	-.16 **	.70 **	1.00			
敵意	-.03	-.04	-.08 +	-.08 +	.73 **	.82 **	1.00		
身体的攻撃	.00	-.09 +	.06	-.02	.67 **	.78 **	.74 **	1.00	
言語的攻撃	.30 **	.12 **	.24 **	.16 **	.89 **	.68 **	.69 **	.68 **	1.00

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

(Table 4)。

その結果、今回修正した「他者配慮」の項目は「素直な表現」($r=.51, p<.01$)、「情動制御」($r=.38, p<.01$)とは正の相関を示し、「主体性」($r=-.10, p<.05$)とは弱い負の相関を示した。また、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙の「短気」($r=-.08, p<.10$)、「敵意」($r=-.04, p\geq.10$)、「身体的攻撃」($r=-.09, p<.10$)との間にはほとんど関連が示されず、「言語的攻撃」($r=.12, p<.01$)とは正の相関を示した。そして、青年用アサーション尺度 ($r=.18, p<.01$)とは正の相関を示した。また、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙のすべての下位尺度は青年用アサーション尺度と正の相関を示した一方、修正版主張性の4要件尺度の「他者配慮」以外の下位尺度とは、「言語的攻撃」と正の相関が示されただけで、その他の下位尺度とは有意な関連は示されなかった。

IV. 考察

本研究の目的は、修正版主張性の4要件尺度における「他者配慮」を、自立的に、他者の率直な表現や他者の主体性を受け入れる姿勢をもち、行動できているかを測定する項目となるよう改編することで、より理論的概念と一致した主張性尺度を作成し、その尺度の信頼性、妥当性を検討することであった。

改訂された修正版主張性の4要件尺度の因子構造を検討するため、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った結果、一部項目の移動が見られたが、修正版主張性の4要件尺度と同様に4つの因子から構成されることが示された。各下位尺度で α 係数を算出したところ、.69-.88であり、一部やや低めの値が見られたものの、今回修正した「他者配慮」の下位項目に関しては、天井効果と重複負荷の傾向が見られた2項目を除外したところ、因子としてよいまとまりを示した。

α 係数が.70を下回った「情動制御」項目は、先行研

究では.81を示していた(渡部, 2013)。「情動制御」項目は一部言葉を分かりやすく変更した(“無理な頼まれごと” → “どうしても嫌な頼まれごと”)ものの、内容については変更していない。因子分析の結果、先行研究では「情動制御」に分類されていた多くの項目が「主体性」に移動し、「情動制御」の項目は9項目から3項目に減少した。本研究では「主体性」に分類されたが先行研究では「情動制御」に分類されていた項目は、緊張や不安、気後れを表す項目であった。一方先行研究においても本研究においても「情動制御」に分類された項目は、落ち着いて対処可能か、平静でいられるかを尋ねる項目であった。渡部(2013)は、「情動制御」は主張性の情動的側面に、「主体性」は主張性の認知的側面に、それぞれ該当すると述べている。このことから、緊張や不安、気後れは認知的な側面を持ち、情動的側面は落ち着いた態度や平静さなどの突発的で抑えられないものによって測ることが出来る要素であると推測される。そのため、先行研究では「情動制御」に含まれていた項目が「主体性」の項目と同一の因子に入ったのだと考えられる。これが「情動制御」因子の α 係数を低下させた一因であると考えられる。このように本尺度の内の一貫性は非常に高い値とは言えないため、結果の解釈は慎重に行う必要があるだろう。

妥当性の検証に関し、本研究では同尺度内での因子間相関と、これまで多くの主張性研究で用いられてきた玉瀬ら(2001)の作成した青年用アサーション尺度(原・梅田, 2017; 高倉・玉瀬, 2015; 堀・宮本, 2013など)、さらに安藤ら(1999)の作成した日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙を用いて、構成概念妥当性を検討することとした。

まず、改訂された修正版主張性の4要件尺度の構成概念妥当性を検討するため、改訂された修正版主張性の4要件尺度の下位因子間の相関係数を算出した。その結果、今回修正した「他者配慮」は、主張性の行動的側面であ

る「素直な表現」($r=.51, p<.01$)、情動的側面である「情動制御」($r=.38, p<.01$)とは正の相関を示し、認知的側面である「主体性」($r=-.10, p<.05$)とは弱い負の相関を示した。また、主張性の行動面を測定する青年用アサーション尺度($r=.18, p<.01$)とは正の相関を示した。このことから、尺度の修正によって、主張性の認知的側面のひとつである「他者配慮」が主張性の行動的側面や情動的側面、その他の認知的側面を阻害しない尺度になったといえる。

また、「他者配慮」と日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙の「短気」($r=-.08, p<.10$)、「敵意」($r=-.04, p\geq.10$)、「身体的攻撃」($r=-.09, p<.10$)との間にはほとんど関連が示されなかった。一方、「言語的攻撃」($r=.12, p<.01$)とわずかに正の関連が示されたが、おおむね他者配慮と攻撃性は弁別できたと考えられる。ただ、言語的攻撃と他者配慮との関連の小ささが今後も検証されるのかは注視していく必要がある。一方、攻撃性の一側面である「言語的攻撃」については以下のような視点もあげることができる。「言語的攻撃」の項目は、“友人の意見に賛成できないときには、はっきり言う”、“自分の権利は遠慮しないで主張する”、“誰かに不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきり言う”、“意見が対立したときは、議論しないと気がすまない”の4項目から構成される。石原(2014)は、ありのままの自分を受け入れることである「自己受容」から「言語的攻撃」に正の関連性が示されたことから、「自己受容」の高さは自分への自信につながり、自分に自信があることで自己の明確な表出が可能となり、「言語的攻撃」を促進すると述べている。つまり、「言語的攻撃」は客観的で冷静な行動と関連する適切な攻撃的側面である(石原, 2014)。また、濱口(2017)は言語的攻撃の能動的・反応的攻撃行動の説明率が低いことから、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙の「言語的攻撃」は自己の権利が侵害される、他者と意見が異なるなどの対人葛藤事態で自己の欲求を主張するという、主張行動を測定するものであると述べている。以上から、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙の「言語的攻撃」は能動的・反応的攻撃行動とは繋がらない適切な攻撃的側面、あるいは主張行動を測定していると考えられる。このことから、「言語的攻撃」と主張性は独立すべき因子ではなく関連のある因子であると考えられ、本研究において修正された修正版主張性の4要件尺度の全ての下位因子と正の相関が示されたことは必然的であったと考えられる。以上のことから、「他者配慮」は攻撃性と独立した因子となり、主張性の理論的概念と一致した項目に近づいたと考えられる。

本研究では、より理論的概念と一致した主張性尺度を作成するため、主張性の認知的側面のひとつである、他者の率直な表現や他者の主体性を積極的に受け入れる姿勢の程度を測る新たな項目群を提案した。しかし、改編した尺度の信頼性・妥当性の検討は今後も引き続き検討の

余地がある。例えば、因子分析の結果、改編した尺度の下位因子の項目数にばらつきが出た。特に、「情動制御」は3項目のみとなり、内的一貫性は.70を下回った。今後、「情動制御」に関する項目数を増やし、内的一貫性を高めることが一つの課題である。また、本研究では再検査信頼性の調査をおこなっていないため、改めて再検査信頼性についても検討を加える必要がある。

本研究で行った妥当性の調査においても課題がある。一つは妥当性を検討するために用いた青年用アサーション尺度が、構成概念妥当性を検証する尺度としては十分なものとは言えない可能性があることである。青年用アサーション尺度は多くの研究で用いられており(原・梅田, 2017; 高倉・玉瀬, 2015; 堀・宮本, 2013など)、十分な内的一貫性を有すると判断し使用した。しかし、本研究における分析では先行研究とは異なる因子が抽出された。また、本研究では攻撃性というネガティブな側面からの妥当性の検討にとどまっているため、既に主張性との関連が示唆されている友人関係満足度や自己受容との関連性の検討に加え、実際の行動傾向との関連を検討することでより客観的なデータを用いた妥当性の検討も必要と考えられる。

V. 引用文献

- Allen, J. J., & Anderson, C. (2015). Aggression and violence: Definitions and distinctions. *The Wiley Handbook of Violence and Aggression*. UK: John Wiley & Sons. Retrieved from public. psych.iastate.edu/caa/abstracts/2015-2019/16AA.pdf.
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子(1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性、信頼性の検討. *心理学研究*, 70(5), 384-392.
- 安藤有美(2009). 大学生における自己表現スタイルと場面特性との関連. *カウンセリング研究*, 42(1), 50-59.
- 安藤有美(2014). 自己表現に及ぶ個人要因と状況要因による影響—自己表現における行動形態についての選好比較—. *四国大学紀要*, 43, 101-110.
- Benenson, J. F., Maiese, R., Dolenszky, E., Dolensky, N., Sinclair, N., & Simpson, A. (2002). Group Size Regulates Self-Assertive versus Self-Deprecating Responses to Interpersonal Competition. *Child Development*, 73(6), 1818-1829.
- 原慎一郎・梅田恭子(2017). アサーション・トレーニングにおける非対面ロールプレイが依頼文に与える効果の検証. *愛知教育大学研究報告*. 教育科学編 66, 143-147
- 濱口佳和(2017). 大学生の能動的・反応的攻撃性に関する研究. *教育心理学研究*, 65(2), 248-264.

- Hershen, M., Kabacoff, R. I., Van Hasselt, V. B., Null, J. A., Ryan, C. F., Melton, M. A., & Segal, D. L. (1995). Assertiveness, depression, and social support in older visually impaired adults. *Journal of Visual Impairment and Blindness*, 89, 524-530.
- 平木典子 (2009). 改訂版 アサーション・トレーニング - さわやかに自己表現のために -. (株) 日本・精神技術研究所.
- 堀菜摘・宮本正一 (2013). 大学生に対するアサーション・トレーニング. 岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学, 62 (1), 123-132.
- 伊庭恵未・幸田のみ子 (2015). ネガティブライフイベントを経験した大学生の二次元レジリエンス要因とアサーションとの関連について. 桜美林大学心理学研究, 5, 1-15.
- 石原俊一 (2014). 対人ストレスユーモアコーピングにおける心理学的健康への効果 (土沼雅子教授・藤森進教授 退職記念号). 人間科学研究, 36, 67-77.
- 金井嘉宏 (2013). <講演1> 「社交不安障害の認知行動療法に活かす基礎研究」(シンポジウム, 不安, うつ, 妄想に挑む心理学: 臨床と基礎の融合を目指して, 専修大学生田校舎 10 号館 1 階 10101 教室, 平成 24 年 6 月 16 日開催). 専修大学社会知性開発研究センター / 心理科学研究センター年報: 統合的心理科学の創成; 心の連続性を探る, 2, 109-126.
- 金子幾之輔・中田久美子 (2003). アサーションに関する研究. 桜花学園大学人文学部研究紀要, 5, 49-54.
- McCartan, P. J., & Hargie, O. D. (2004). Assertiveness and caring: are they compatible?. *Journal of Clinical Nursing*, 13 (6), 707-713.
- 三田村 仰・横田正夫 (2006). アサーティブ行動阻害の要因について. パーソナリティ研究, 15 (1), 55-57.
- 用松敏子・坂中正義 (2004). 日本におけるアサーション研究に関する展望. 福岡教育大学紀要 第 4 分冊 教職科編 53, 219-226.
- 無藤清子 (2002). 個人カウンセリングにおけるアサーションの意味. 平木典子, 沢崎達夫, 土沼雅子編「カウンセラーのためのアサーション」金子書房, 2 章 53-88.
- 坂田瑞樹・松田英子 (2016). 大学生の主張行動および対人ストレスコーピングが友人満足感に及ぼす影響. 江戸川大学紀要, 26, 51-58.
- 沢崎達夫 (2006). 青年期女子におけるアサーションと攻撃性および自己受容との関係. 目白大学心理学研究, 2, 1-12.
- 高橋 均 (2006). アサーションの規定因に関する研究の動向と問題. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域, 55, 35-43.
- 高倉 巧・玉瀬耕治 (2015). メール依存に関わる諸要因と非対面アサーション尺度の開発. 帝塚山大学心理学部紀要, 4, 29-38.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001). 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討. 奈良教育大学紀要. 人文・社会科学 50 (1), 221-232.
- 渡部麻美 (2006). 主張性尺度研究における測定概念の問題. 教育心理学研究, 54 (3), 420-433.
- 渡部麻美 (2013). 主張性の 4 要件尺度の改編と妥当性の検討: 攻撃性との関連に焦点を当てて. 社会言語科学, 16 (1), 96-108.
- 渡部麻美・松井 豊 (2006). 主張性の 4 要件理論に基づく尺度の作成. 筑波大学心理学研究, (32), 39-47.
- 山根由梨・深見俊崇・石野陽子 (2016). 児童のアサーションと自尊感情との関連. 島根大学教育臨床総合研究, 15, 107-121.

(2018年8月24日受付)

(2018年10月3日受理)